

ミルクたっぷりの酒・ブクログ のパブー版ー思索編

小野ユージン

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年4月20日公開

道徳的な規範は、「良いこと（正しいこと）をしなければいけない」というものと、「悪いことをしてはいけない」というものがあるだろう。

「良くないこと（正しくないこと）は悪いこと」という善悪二元論的な価値観をもっている人にとっては、前述した2つの言葉はほぼ同じ意味になるだろう。

だが、「良いこと（正しいこと）」と「悪いこと」の間には、「良いこと（正しいこと）ではないが悪いことでもないこと」、善悪二元論に収まりきらない中間ゾーンあるいはグレーゾーンがあると考えている人にとっては、前述した2つの言葉は同じ意味ではない。

「悪いことをしてはいけない」という命令は、「良いこと（正しいこと）ではないが悪いことでもない」ことはしてもいいことになる。「悪いことをしてはいけない」という言葉は、同時に「悪いことさえしなければそれでいい」という意味になるので、許される行動の範囲はかなり広くなるだろう。

例えば、買売春や未成年の飲酒・喫煙を道徳的に「悪いこと」であると考えている人は、これらの行為をすることは許せないことになる。一方、「良いこと（正しいこと）ではないが、悪いことでもない」と考えている人は、これらの行為をしてもいいことになる。

ある行為が、道徳的に「悪いこと」であるか、「良いこと（正しいこと）ではないが悪いことでもない」かについて意見が分裂している場合、その行為についての議論はかなり錯綜したものになるだろう。

買売春や未成年の飲酒・喫煙を道徳的に「悪いこと」であり、しかも法律で規制すべき行為と考えている人たちは、これらの非合法化に当然賛成するだろう。

道徳的に「悪いこと」ではあるが、浮気や不倫などのように法律で規制すべき行為ではないと考えている人は、これらの非合法化に反対するだろう。

買売春や未成年の飲酒・喫煙は、道徳的に「良いこと（正しいこと）ではないが悪いことでもない」と考えている人も、当然これらの非合法化に反対するだろう。

買売春や未成年の飲酒・喫煙は、法律では違法行為とされているが、厳格に取り締まることもなく黙認されている。それは、これらを法律で規制すべきかについて意見がわかれているだけではなく、道徳的に「悪いこと」であるか、「良いこと（正しいこと）ではないが悪いことでもない」かについても意見がわかれているからだろう。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年5月18日公開

人間が、複数の選択肢からある行為を選択する時は、「道徳的に良いことで、かつ得になること」が最良の選択であろう。一方、「道徳的に悪いことで、損になること」が最悪の選択であることにも多くの人が同意するだろう。

だが、選択肢が「道徳的には良いことだが損になること」と「道徳的には悪いことだが得になること」の2つしかない時にどちらを選ぶかは、人によってことなるだろう。道徳的な善悪を重視する人は前者を、功利的な損得を重視する人は後者を選ぶだろう。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年5月18日公開

もう何年も前のことになるが、テレビで「日本人の道徳」といったタイトルの番組をやっていた。そこでは、様々な状況下で2つの選択肢が提示され、どちらの選択が道徳的に良いことを、出演者たちが多数決で決めていた。

その番組をみていて違和感を覚えたのは、多くの出演者が、その人にとって得になることを良いこと、損になることを悪いこととして選択をしていたことである。私の価値観からすれば道徳的・倫理的に悪いこととしか思えない選択肢を、自分にとって得になるからという理由で良いこととして選んでいた人が多くいた。

のちに何かの本で、日本ではキリスト教や儒教などの普遍的な倫理を説いた宗教が根づかず、功利的な損得が行動の基準となっているという記述を目にして、自分の感じた疑問の謎がとけた気がした。

道徳的・倫理的な善悪と、本人にとっての損得が区別されず、得なことを道徳的にも良いこと、損なことを道徳的にも悪いこととしているのだろう。（なお、哲学・思想用語としては「道徳」と「倫理」はことなる定義がされているようだが、ここではこの2つを同義語として使用している。）

○イラク戦争をめぐって

イラク戦争を支持したアメリカ人の中には、のちにあの戦争はまちがった戦争だったとして、戦争を支持した自分の立場を反省した人が多い。

だが、日本でイラク戦争を支持した人たちは、あの戦争を支持した自分の立場はまちがっていなかったとする人たちが多い。

イラク戦争を支持したアメリカ人は、イラク戦争が道義的に正しい戦争であるかも考慮し、正しい戦争だと信じていた時はこれを支持していたが、「イラクの大量破壊兵器保有」の情報が虚偽だったと判明した時には、道義的にまちがった戦争だったと考え直し、戦争を支持したかつての立場を批判するようになったのだろう。

一方、イラク戦争を支持した日本人は、イラク戦争が正しい戦争かどうか、これを支持することは道義的に正しいのかといったことは考えず、戦争を支持した方が得か、支持しない方が得かと損得でこれを判断したのだろう。

だから、大量破壊兵器情報が虚偽であったとしても、北朝鮮の脅威があったあの時点では、「イラク戦争を支持した方が得だ。」と判断したことはまちがっていなかったとして、かつての自己の立場を批判したり反省したりはしないのだろう。

なお、なぜ多くの日本人は道徳的・倫理的な善悪ではなく、功利的な損得を行動の基準とするようになったのか、なぜ倫理的な善悪を説いたキリスト教思想や儒教思想は日本に根づかなかったのかは、興味深いテーマである。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年5月21日公開

メディアにおいては、理想主義か現実主義かといった二元論・二項対立的な言説を時々みかけるのだが、理想主義と現実主義をそれぞれ2つに分けてみたい。

まず現実主義。目的を達するためには、あるいは願望や欲望、快楽をみたすためには何をやってもいいという考え方、これを「道義なき現実主義」または「超現実主義」と呼ぼう。

それに対して、目的を達するために現実的な思考をするが、一方で道德、倫理、道義なども尊重する考え方。理想主義者のように欲望や快楽そのものを否定はしないが、願望や欲望、快楽をみたすためには何をやってもいいという考えは拒否し、願望、欲望、快楽を充足させることと、道德や倫理、道義を守ることを両立させる考え方。こちらを「道德的現実主義」、あるいは矛盾した言い方になるが「理想主義的現実主義」と呼ぼう。

次に理想主義。理想を純粹に追及することを重視し、現実との妥協を日和見主義として嫌う考え方。これを「純粹理想主義」または「超理想主義」（あるいは「観念的理想主義」「原理的理想主義」）と呼ぼう。

また、理想を求めはするが、一方で現実を受け入れ、現実を少しずつ理想に近づけることを重視する考え方。実現可能性のない理想を主張するのではなく、理想を実現するための現実的な方法を模索する態度。こちらを「妥協的理想主義」、形容矛盾かもしれないが「現実主義的理想主義」と呼ぼう。

「道德的現実主義」と「妥協的理想主義」は、ともに理想と現実とのバランスを保とうとする思考なので、この2つをあわせて「中庸主義」と呼べるだろう。このようにみてくると、「理想主義」と「現実主義」の二元論を、「理想主義（超理想主義）」「中庸主義」「現実主義（超現実主義）」の三元論へと移行できる。

○右派・左派と理想主義・現実主義

右派の中で理想主義、観念的な思考をする人を「右派イデアリスト」「右派イデオロギスト」、現実主義的な思考をする人を「右派リアリスト」と呼ぶ。

一方、左派の中で理想主義、観念的な思考をする人を「左派イデアリスト」「左派イデオロギスト」、現実主義的な思考をする人を「左派リアリスト」と呼ぶ。

左翼は一般的に理想主義的だが、現実主義的な思考をする人たち（「左派リアリスト／現実主義左翼」）は、「妥協的理想主義者」（「現実主義的理想主義者」）に該当する。一方、現実との妥協を嫌悪する人たち（「左派イデアリスト／理想主義左翼」）は、「純粹理想主義者」（「超理想主義者」）に該当する。

右翼・右派・保守派を現実主義者とみなせば、「右派リアリスト」が「道德的現実主義者」（「理想主義的現実主義者」）にあてはまるかもしれない。「右派イデオロギスト」をそのまま「道義なき現実主義者」と同一視はできないかもしれないが、このタイプの人がかかなりみられ

るのは確かである。（そもそも、右翼・右派・保守派を現実主義者とみなすこと自体に無理があるかもしれない。）

○「理想主義と現実主義の再定義」応用編：日本の戦争をめぐって

戦前の日本、特に1930年代以降の日本は、世界的な経済危機、緊迫した国際関係の中で国中がいきなり「道義なき現実主義」へと傾いていったといえるだろう。国益のためには、日本の生き残りのためには何をやってもいいという考えに陥り、国際法も道徳も倫理も無視してひたすら日本の利益のみを追求していった。

＜太平洋戦争＝大東亜戦争＞においては、戦場となった地域の住民たちが多大な被害をこうむっているにもかかわらず、これを植民地支配からの解放戦争だといって正当化した。自分（たち）のこと、自国のことしか眼中にないという視野狭窄に陥った。

（1910年に韓国を併合した時から「道義なき現実主義」に傾いていったという考え方もできるけれども。）

一方、戦後はその反動から、「思想言論の世界」において「純粹理想主義」の立場の人たちが主導権を握り、「道義なき現実主義」だけではなく、「道徳的現実主義」「妥協的理想主義」の立場にいる人たちすらも保守反動とみなして批判していたように思える。

こうした状況の弊害は、憲法9条と自衛隊の問題に関して最もよくあらわれているだろう。日本の行った戦争を正当化している「道義なき現実主義者」たちが憲法改正を主張していたために、戦争への嫌悪感をつよくもっていた多くの国民が憲法改正に拒否反応を示す。

一方では、現実との妥協を拒否する「純粹理想主義者」たちが、非武装中立、絶対平和主義的な理想論を唱え護憲を主張する。

現実を踏まえ、その上で実現可能性のある政策を考えなければいけない問題についてまで、右の極論と左の極論がイデオロギー闘争を繰り広げている。

憲法9条と自衛隊の問題は、「道徳的現実主義」と「妥協的理想主義」の立場にある人たちが、討議を通じて国民にとって一番よい政策をうちだすべきだろう。そうしないと、何かをきっかけとして再び政府や国民がいきなり「道義なき現実主義」へと傾いていってしまうだろう。

理想主義の2つの形

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年5月22日公開

理想主義者には2つのタイプがあるように思う。1つは、遠い将来には自分たちの理想が実現できると考えている人たち。もう1つは、結局人間には理想は実現できない、そう思いながらも理想を追求すべきだと考えている人たち（このようなタイプを理想主義者といってよいのかは疑問だが）。

また、理想主義者は理想を実現する方法からも2つに分けられる。1つは、究極の目標（理想）がどのようなものであるか、具体的なビジョンをもっていて、その実現にむけて前進していこうとする方法。もう1つは、究極の目標（理想）の具体的なビジョンをもたず、現実の悪いところ、よくないところをすこしずつ改良・改善していくという方法。

将来理想が実現できると考える人を「楽観派」、理想の実現は不可能だと考える人を「悲観派（諦念派）」と呼び、究極の目標（理想の実現）に向けて前進していく方法を「理想追求主義」、現実を改良・改善すること自体を目的とする方法を「現実改良主義」と呼ぶことにする。

2つのパターンを組み合わせると4つのタイプに分けられる。

- 1・楽観派 — 理想追求主義
- 2・悲観派 — 理想追求主義
- 3・楽観派 — 現実改良主義
- 4・悲観派 — 現実改良主義

1・楽観派 — 理想追求主義

将来の理想の社会（世界）の具体像をもっていて、かつその理想が実現できると信じている人たち。神の世を実現しようとする宗教家、将来、共産社会が実現できると信じているマルクス主義者などにこのタイプがみられた。神の世だとか、共産社会が理想の姿だと考えていない人たちにとっては、彼らは迷惑な存在だろう。

2・悲観派 — 理想追求主義

将来の理想の社会の具体像をもっているが、それが実現はできないと考えている人たち。理想が実現できないことに絶望すれば虚無主義におちいってしまうかもしれない。理想が実現できないと知りながらも運動を続ければ、運動を続けること自体が自己目的化してしまう。自分自身の生きがいを満たすために運動を行い、目的が達成されるかは二の次になるという倒錯におちいりやすい。

3・楽観派 — 現実改良主義

現実の悪いところ、よくないところをすこしずつ改良・改善していけばやがては理想の社会が

実現できるという楽観的な考えの人たち。理想の社会についての具体像があるわけではないので、価値観のちがいで反発を受けることは少ない。ただ、道徳的・倫理的な姿勢が人から疎まれる傾向はある。

4・悲観派 — 現実改良主義

人間に理想の社会は実現できないと思いながらも、虚無主義におちいらずに、現実の悪い点を改革・改良しようとする、ある意味ストイック（禁欲的）といえる生き方かもしれない。人は往々にして「すべてかゼロか（理想を実現するか、現実をすべて肯定するか）」という発想におちいりやすいが、理想は実現できなくても現実を少しでもよくしよう（現実の悪いところはなくしていこう）という、一番望ましい生き方かもしれない。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年6月9日公開

自由の概念については、消極的自由と積極的自由の区分があるそうだが、理想主義も、消極的理想主義と積極的理想主義に分けることができる。

消極的理想主義は、マイナス状態をプラス・マイナスゼロ状態にすることを目指す。一方、積極的理想主義においてはそれだけでは不十分で、マイナス状態、プラス・マイナスゼロ状態をプラス状態にすることを目標にする。

ただ、プラス状態がどのようなものかは人によって考えがことなる。そのため理想（プラス状態）についてことなる考え方をもつ人たちが、自分たちにとっての理想をもとめて闘争状態におちいるということが、往々にして生じる。

もちろん、マイナス状態がどのようなものかについても、すべての人が共通した考えをもつ絶対的な基準があるわけではない。だが、貧困、暴力の恐怖、奴隷状態におかれることなどの、多くの人が考えるマイナス状態に対しては、それらを失くしていくことを共通の目標にすることができる。

これは、幸福や不幸についても同じような考え方ができる。なにが幸福かについては人それぞれ価値観がちがうから、政治権力はこれに介入するべきではない。

だが、個人の不幸の原因が貧困などの政治の力で解決できるものであり、当事者が自身の力でこれを解決できず、また政治権力の介入を拒否しないのなら、政治の力で不幸の原因を取り除こうとすることが消極的理想主義の実現になる。

菅新総理の「最小不幸社会」というスローガンは、消極的理想主義の立場を鮮明にあらわした考え方といえる。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年6月11日公開

理想の社会、といってもすべての人々が理想的だと思うような社会はありえないだろう。人の価値観は多様であり、何が善いことで何が悪いことなのかについての絶対的な基準はない。

また、何に生きがいや喜びを感じるか、どのようなことに幸福を感じ、逆に何が不幸の原因となるかは人それぞれである。ある人にとって理想と思える社会が、別の人間にとっては生きがいの感じられない社会であることもあるだろう。

理想の社会をつくろうなどという運動は、その理想を共有しない人にとっては迷惑なものにすぎないだろう。だから、これから述べる理想の社会とは、私自身がどのような社会を良いものだと考えているかという、個人的な価値観の表明にすぎない。

○貧困と暴力の恐怖のない社会

理想の社会という言葉で真っ先に思い浮かべるイメージは、「貧困と暴力による恐怖」のない社会だろう。ユートピアというと、争いも飢えもなく人々がのどかに暮らしている牧歌的な風景を思い描く。

ただ、貧困や暴力の恐怖がなくなればそれでいいのかという反論も当然あるだろう。貧困がなくなっても、管理された自由のない社会で、ただ飢えと暴力の恐怖からのみ解放されているのなら、多くの人は不幸を感じるだろう。

だから、貧困と暴力の恐怖のない状態は、理想の社会を考える際の必要最小限の条件にすぎないのだろう。（ただ、その必要最小限の条件をみたすことすら人間には不可能だろう。また、貧困と暴力の恐怖のない社会が実現した場合、そのことがある人たちにとっての不幸の原因となることすらあるだろう。）

理想主義者の中には、貧困と暴力の恐怖のない社会をつくりだせばそれでいいと考えている人たちと、それだけではだめで、それ以上の高い目標をめざさなければならないと考えている人たちがいる。

ただ、より高い目標の内容は個人の価値観によってことなるために、多くの人の共感はえられないことが多い。貧富の差のない社会を理想と考える人も多いが、これは他人より多く富をえたいと考えている人たちの価値観や生き方を否定することにつながる。

多くの人がもっている欲望を否定することによって成り立つ理想の社会は、実現不可能であるし、そのような社会を無理につくりだそうとすれば、それは人間の自由を否定した恐怖政治・専制政治になってしまう。

かといって人間の自由や欲望を無制限に認めてしまえば、「万人の万人に対する闘争状態」に陥ったり、自由な経済競争により多くの貧困者が生じることになる。人間の欲望をすべて否定することもできず、かといって人間の欲望や自由をすべて肯定することもできない。どのような欲望や自由は否定・禁止してはいけないのか、逆に否定・禁止した方がいいのか、一つ一つ検討

していく必要があるだろう。

○貧困の撲滅

貧困の撲滅に関しては、私がみたところ2つの考え方がある。1つは、貧困の撲滅・経済的不平等の是正を目的として人間の自由な経済活動を規制し、計画的にその目的を達成しようとする社会主義的な方法。もう1つは、人間の自由な経済活動（資本主義経済）を前提としながら、自由な経済競争の結果生じた貧困を政治権力による富の再配分によって解消しようとする社会民主主義的あるいは福祉国家的な方法。

私自身が考えるのは、まず自由な経済競争を前提とする前に、貧困の生じない制度・システムを作為的に作りだし、その制度・システムの上で自由な経済競争を行うというものである。

富に執着せず、人並みに暮らせればいいと考える人は、この制度・システムの上で普通に生活していけばいい。一方、富の獲得に生きがいを求める人は、この制度・システムの中で認められた基準・法に従って、個人の欲望や願望を追求すればいい。

ただ、個人の欲望や願望を追求する自由な行為が他者の生活をおびやかす場合には、その行為に一定の制限を加える。こうすることによって人間の欲望と倫理、自由と規制のバランスを保った「最大多数の最大幸福」が実現しやすい社会になるのではないだろうか。（ただし、私が不勉強であるだけで、ここで述べたような社会思想・社会理論は既に存在しているのかもしれない。それに、貧困の生じない制度・システムを作為的に作り出す方法は、社会主義的な方法しかないのかもしれないが。）

○暴力の恐怖からの解放

暴力は、人間の本性ともいべき性質からおこるものだから、人間が別の種へと進化でもしないかぎり、人間の社会から暴力がなくなることはないだろう。だが、人間は暴力を嫌悪し否定する理性・倫理感なども同時にもっているから、人間社会から暴力をなくそうとする動きも当然おこるし、またそう努力すべきだろう。

そして人間の社会から暴力の恐怖をなくす方法は、国内レベルでは近代の民主主義思想・人権思想に基づいた法治国家を、その理念通りに運営していくしかないだろう。権力をもった者は、その力を私用・濫用しやすいから、公権力機関が多くの人々を抑圧することもままあるだろう。その際には、公権力の保持する暴力装置である警察が、暴力団のような存在となってしまうだろう。

ただ、公権力による暴力装置を廃止したとしても、人々が自分の身を自分で守らなければならなくなるだけだから、力のない者は暴力の恐怖にさらされ続けることになるだろう。公権力・警察が暴走しないよう、法治国家がその本来の理念通りに機能しているかを、人々が絶えずチェックしていくしかないだろう。

○戦争

国際レベルでの暴力の恐怖の代表は戦争であろう。そして人間の社会から暴力をなくすことが

困難（というよりも不可能）であるように、戦争のない社会をつくることも残念ではあるが不可能だろう。

近代的な民主主義国家では、法による支配が確立し、不当な暴力・不正な暴力を抑制する制度が整備されている。だが、国際社会は法による支配が確立されておらず、近代的な国民国家（民主主義国家）成立以前と同様の、力による支配が主流となっている社会（封建社会、戦国社会）といえるだろう。

戦争そのものを違法とする国際法を制定し、違法行為を制裁するシステムが実現できたなら、不当な戦争・不正な戦争が抑制されるかもしれない。ただし、一国レベルでは民主主義的な法治国家を実現できても、国際レベルでそのような制度を実現するのは不可能かもしれない。

近代的な民主主義国家も、武力闘争の結果、暴力装置を公権力の下に一元化できた時に法による支配が確立できたといえる。平和的な方法で国際法による秩序が確立できない時は、現在ののような状況が続くか、それとも国際法による支配体制を確立するために武力闘争（戦争）が生じるというパラドックスに陥るしかなくなるだろう。

社会に関する4つの思考

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年6月10日公開

近代以降、社会に関しては4つのタイプの思考あるいは志向があるように思う。

1つ目は共産主義的思考、アナキズム的思考あるいはユートピア志向。

力による他者の支配、富める者と貧しい者との経済的不平等、このような人間社会の根本的なあり方を嫌悪し、支配―被支配関係のない平等な社会、経済的不平等の少ない社会を夢想し追求する志向性、またはその思想。

2つ目は社会民主主義的思考、または福祉国家志向。

支配―被支配のない人間関係、経済的不平等や貧困のない社会、このような社会が実現できるのならばそれは望ましいことだと考える。

だが一方で、力による他者の支配や経済的不平等は人間の本性から生じる要因も大きく、共産主義者やアナキストたちの望むような理想社会は人間にはつくれないだろうという一種の諦念ももつ。それでも貧困や暴力による恐怖のない社会を努力してつくりあげていこうとする志向性、そしてその思想。

社会悪は、社会制度や社会構造などの環境・社会的要因と、人間の性質による要因、両方に原因があると考ええる。人間が人間である限り、その性質が変わらない限り、人間の性質が原因となって生じた社会悪はなくなる。だが、社会制度や社会構造をつくりかえることによって、これらが原因となって生じた社会悪はなくしていこうとする立場。

ユートピア志向のつよい人、理想主義的志向のつよい人たちからは「日和見主義者」として非難されることもあるが、現実主義的考えをもち、現実の社会問題を少しずつ解決していくことをよしとする思考。

3つ目は自由主義的思考、または近代市民社会志向。

共産主義的思考や社会民主主義的思考の持ち主は、貧困の撲滅や人々の共生を求める志向性があり、競争といったものにあまり価値をおかない。

だがこの3つ目の思考・志向性の持ち主は、競争、そして競争の結果生じる進歩、成長といったものに重要な価値をおく。競争に勝ち抜くための努力、勤勉さを尊重し、人の助けを借りず自らの力で生きていくことを何よりも重視する思考。競争に負けるのは本人の努力が足りないからだ信じ、弱者の救済といったことに対して否定的な考えをもちやすい。

だが一方では、競争のための公平・公正な前提条件・ルールなどを作為的につくりだそうとする考えももつ。結果の平等よりも機会の平等に価値をおき、公平・公正な条件、透明性のあるルールの下で競争を行い、成長を遂げるべきだとする思考。

4つ目は封建主義的思考、あるいは前近代（非近代）的志向。

これは、力のある者、富をもつ者がより力や富を手にするを当然とする思考。人間の自然な政治行動、経済行動を何よりも重視し、社会のあり方を人工的・作為的に作りかえることを否定する考え方。

政治権力の力で貧困を撲滅しようとする福祉国家的思考だけではなく、競争のための公平・公正な条件をつくりだそうとする市民社会的思考すらも批判する思考。近代的な、人間の理性によって社会を理想的なものにつくりかえようとする発想自体を否定する思考。

このタイプの人、道徳というものを非常に重視するが、彼らの唱える道徳は往々にして力のある者、富をもつ者が、力のない者、富をもたない者を支配・抑圧する道具（支配イデオロギーとでもいうべきもの）になりやすい。

また、このタイプの人（自分自身、力や富をもっている人）は、自分が力や富を手にしたのは、努力が実ったから、あるいは公平・公正なルールの下での競争に勝ったからなのだと主張したが、実際には不公平・不公正な条件の下で有利に力や富を手にした場合も多い。

「進歩史観」の持ち主なら、人間の歴史・社会は「封建社会」－「市民社会」－「福祉国家」へと進歩してきたと考えるかもしれないし、「唯物史観」の持ち主なら、その先に社会主義から共産社会への移行を考えていたのだろう。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年7月8日公開

刑法のない社会は2つ考えられる。1つは、人が殺人や窃盗といった道徳的・倫理的に悪いとみなした行為をしない社会。もう1つは、殺人や窃盗などの行為を悪いことだと思わないし、取り締まるべきだとも思わない社会。人間は、自分たちのする行為のうち幾つかのものを悪いこととみなす不思議な生き物といえる。

○殺人が先か倫理が先か。または最初の殺人

人は、最初の殺人行為が起こる前から、殺人を悪いこととみなしていたのか。それとも殺人行為がいくつか起こったあと、ある時点からそれを悪いこととみなすようになったのか。馬鹿馬鹿しい問いかもしれないが、面白いテーマでもある。

ある行為を倫理的に悪いこととみなすのは、その行為が実際に行われた後と考えられるから、最初の殺人が起こる前から殺人が悪いことだといった倫理観があったとは考えにくい。

だが、それが事実なら人間は殺人行為を悪いことだとは考えない暮らしを一定の期間送っていた可能性もある。徐々にか突然か、それまで悪いこととみなさなかった行為を悪いこととみなすようになったといえる。

○動物殺しと人殺し

だが、実際には最初の殺人が起こる前に、動物を殺すという行為が行われていたと考えられる。だから、対象が人であるか動物であるかを問わず、殺しという行為が悪いことだという倫理観は、最初の殺人が発生する前から芽生えていたとも考えられる。

動物殺しは生存のための必要悪であるために、やむをえないことと考えられていた。だが、殺人行為は必要悪ではないために、それが起こる前から悪いこととみなされていたのかもしれない。

○その他いくつかの疑問点

殺人を悪いこととみなす倫理観が、いつどのようにして芽生えたかを考察する際は、社会・共同体内でおきた殺人行為と、戦争などのことなる部族・共同体の間で発生した殺人行為をわけて考える必要があるかもしれない。

また、最初に殺人を行ったとき不快感・違和感のようなものを感じ、その感覚が人殺しは悪いことだという倫理観になったのかもしれない。

なぜ、人を殺してはいけないのか？

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年8月9日公開

「なぜ、人を殺してはいけないのか？」といったテーマが、10数年前、出版業界でちょっとした話題になったことがあった。私自身は、このテーマ自体にはさして関心がない。

多くの人間は、おそらく「人殺しがいけないこと、悪いこと」といった倫理観のようなものを遺伝のレベルで受け継いで生まれてくるのだろう。そして、生まれたあとの経験や学習、教育によって「人殺しがいけないこと、悪いこと」といった価値観や規範意識を学び、身につけ、内面化して成長していくのだろう。

だが、極少数ではあるかもしれないが、「人殺しがいけないこと、悪いこと」といった価値観、倫理観をもたずに生まれてきて、生後の経験や学習によってもそのような価値観を身につけない人間がいるのかもしれない。そのような人間に対して、人殺しがいけない理由を説明したとしても、おそらく説得することは難しいだろう。

多くの人間は、人殺しがいけないこと、悪いことであることを絶対的な価値観、真理であるかのように信じている。だが、それは、多くの人間がそのように信じているというだけの話であって、あらゆる価値観が相対的なものであるにすぎないように、「人殺しがいけないこと、悪いこと」といった価値観、倫理観も根本的には相対的なものにすぎない。

今までは、多くの人間が「人殺しが悪いことである」という価値観を無条件に信じてきたから、人間の社会は上手くやってこれたのかもしれない。そのような価値観をもたない人間が徐々に増えていき、やがては多数派になるような時代がきたときには、人間の社会はどうなっているのだろうか。

私は、「なぜ、人を殺してはいけないのか？」といった問いかけには関心がないと言ったが、人殺しを違法行為とし、人殺しをした人間を法によって裁くことには賛成している。

現実的にはおこらないだろうが、人殺しを違法行為でなくしたら（合法行為としたら）、人間の社会はどうなるだろうか。殺人事件は増大するだろうか（合法化された場合は事件とは言わないのかもしれない）。

罰せられるのが怖くて、殺人行為を自制（抑制）している人たちが相当数いるのなら、増大する可能性は高いだろう。だが、法によって殺人行為を違法としていることが、殺人行為の抑制になっていないのだとしたら、合法化したからといって殺人件数が増えはしないのかもしれない。なんらかのトラブルが原因で殺人行為が発生するのだとしたら、殺人が合法化されたとしても、殺人件数が増えるわけでもなく、今まで通りの割合で殺人事件がおこるだけかもしれない。

ただ、多くの人間は、「人殺しは悪いことである」という価値観と同様に、「悪いことをした人間にはなんらかの罰があたるべきだ」といった因果応報ともいった価値観をもっているから、殺人を行った人間に天罰も下らず、法による裁きもなされない状況には耐えられないだろう。

だから、多くの人間が「人殺しは悪いことである」「悪いことをした人間には、相応の罰を与えるべきだ」といった価値観をもっている間は、殺人行為が合法とされることはないだろうから

、ここで述べているようなことは、頭のおかしな人間の妄想として片づけられるだろう。

なお、私は「なぜ、人を殺してはいけないのか？」といった問いかけには関心はないが、「人殺しが悪いことだ」といった価値観、倫理観が人類の歴史のどの段階でどのようにして芽生えたのかについては、大いに関心がある。

それは、生物進化の段階で、人類が現在の生き物になる以前の段階から受け継いできた価値観なのか、それとも人類が人類になってからもつようになった価値観なのか。文化をもつようになってからのことなのか、言葉との関係はどうなのか。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2011年1月20日公開

近代化の特徴の1つは、「欲望の解放・自由の拡大」だろう。農業を基盤にした産業形態では、基本的に人間は自然と調和しながら自足的な経済を営み、「より多くの富を獲得したい」という欲望はあまりみだされなかつただろう。（支配層・特権階級の間では、人と土地の支配権をめぐる争いがおこり、戦いに勝利した者が「他者を支配する」「富の獲得をめざす」という欲望をみだすことができただろう。）

近代化した工業を基盤にした産業形態では、自然の支配、経済成長による富の拡大が経済の基本的な形態となった。自由な経済活動が肯定されるようになると、「より多くの富を獲得したい」という欲望が全面的に解放されることとなる。

人権思想などの近代的な思想が人々に受け入れられるようになると、身分制が（原則的に）廃止され、封建的な身分秩序から解放されるとともに、政治活動の自由も拡大されることとなる。

身分制の廃止、政治活動の自由の拡大など政治的近代化に対しては、多くの人が（非近代的な封建的な秩序に回帰したいと考えている人以外は）肯定的な評価を下しているだろう。

だが、経済的近代化に対しては肯定的な評価と否定的な評価がみられる。肯定的な評価は、「進歩史観」的な考えがその代表で、「人間が物質的に豊かになること＝幸福の増大」と考える。

一方否定的な評価には、「工業化＝自然の支配」が環境破壊をひきおこし、やがては地球環境が生物の住めないものになるといったものがある。また、経済的な富を求めることを道徳的（倫理的）に悪いこととみなす立場からの批判もある。

「欲望の解放・自由の拡大」という特徴は、政治的近代化と経済的近代化、両方にみられるものだが、政治的近代化にはもう1つの特徴がある。

それは、本来「不公平・不公正・不平等な人間の社会」を、（理性や倫理などによって）作為的に「公平・公正・平等なもの」につくりかえようとするものである。

近代の民主主義的な政治制度自体が、政治制度・社会制度を公平・公正・平等なものにつくりかえようとした努力の結果といえる。

ただし、社会をできるだけ公平・公正・平等なものにしようと努力しただけであって、現実に公平・公正・平等な社会を実現した国家・地域はどこにもないだろう。（それ以前に、公平・公正・平等な社会がどのようなものかについては意見の対立があり、すべての人が納得する公平・公正・平等な社会などは思想や理念の中にも存在していないといえるが。）

日本は戦後、世界第2位の経済大国になり、経済的には近代化したとみなせるが（人によっては、日本の経済的近代化は欧米のものとはちがい、十分に近代化していないと解釈しているかもしれないが）、政治的には充分近代化したとはいえない。

その理由の1つには、日本人が政治的近代化のもう1つの価値観、「不公平・不公正・不平等な社会を、公平・公正・平等なものにつくりかえよう」という価値観を重視していないことがあ

るように思う。

「欲望の解放・自由の拡大」という価値観は多くの人に受け入れられた。（明治期の身分制度の廃止、立身出世主義、経済活動の自由化など。）だから、経済的近代化は比較的容易に達成され、政治的近代化も半分ちかくは成し遂げたといえる。

だが、政治的近代化のもう1つの価値観がないがしろにされているために、民主主義的な制度や法を輸入し、民主主義的な形式をもった政治制度をつくっても、なかなか欧米のような立憲国家・民主主義国家にはなれないのだろう。

（日本人が「公平・公正」という価値観を尊重していないということは、現在でも目にすることができる。学校の入学試験は、本来公平・公正な条件のもとでなされるべきだが、有名芸能人を特別扱いして合格させるなどということが平然と行われているし、それに対する抗議の声などもあまりみられない。）

ただし、欧米人は日本人と比較すれば「社会を公平・公正・平等なものにしよう」という意識がつよいだろうというだけの話であって、欧米社会が公平・公正・平等な社会であるわけではない。

アメリカなどは何十年か前までは奴隷制の国だったし、自由な経済競争の結果、貧富の差が激しい。日本は、外国に比べると経済格差が少ないといわれているから、「平等」という価値観は尊重されているかもしれない。

日本人が「社会を公平・公正・平等なものにつくりかえよう」という意識が弱いのは、「自然」という観念のとらえかたに理由があるのかもしれない。

ヨーロッパの自然主義における「自然」は、現実とはちがう本来あるべき姿のことだと聞いたことがある。現実が、本来あるべき自然の姿とことなるときは、現実を本来あるべき自然の姿につくりかえようという動きがおこるらしい。社会の本来あるべき自然の姿が「公平・公正・平等なもの」だと考えれば、不公平・不公正・不平等な現実を、公平・公正・平等なものにつくりかえようとするのだろう。

一方、日本の自然主義における「自然」は、現実そのもののことらしい。現実の姿こそが自然な形であり、これを作為的につくりかえようとすることは不自然な行為と考えるらしい。

現実が不公平・不公正・不平等なものであれば、それこそが自然な姿なのだから、現実を公平・公正・平等なものにつくりかえることは不自然なことであり、やっても無駄なことだと考えているのかもしれない。

「明治維新/敗戦」？or「黒船来航/満州事変」？

＊ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2011年3月19日公開したものを一部修正して転載

○『小説トリッパー』対談での鈴木光司の発言より

図書館で借りた『小説トリッパー』（朝日新聞出版）2009年秋季号を読んでいたら、福岡伸一と鈴木光司の対談で次のような発言をみつけた。

>>

鈴木「徳川幕藩体制は明治維新でいったん壊されましたが、壊されたときに、日本はもの凄い力を発揮したのです。いわゆる、文明開化です。（省略）それから七十年ばかり経ち、硬直化が始まりました。（省略）さらに、アメリカと開戦するという判断ミスをしてしまう。敗戦によって、いったん、明治維新以降七十年間に構築したものがチャラになりました。そしてすべてが壊された戦後、日本はまたもの凄い実績を上げます。社会を構築させることに見事に成功したのです。そして、終戦後七十年が経とうとしている今、再び社会の硬直化が始まっているわけです。ただし、現在ある社会システムを七十年前のように戦争で壊すわけにはいきませんよね。すべてなかったことにはできないかもしれないけれど、政治のシステムとしてうまく壊して、再構築することが必要なのです。どのような方法で壊して、再構築するか。それを考えなければいけない時代にさしかかっています。」

<<

○第三の革命待望論

戦後の社会システムが金属疲労をおこし、明治維新、敗戦後の新国家づくりに匹敵する第三の革命（新たな社会システムの構築）が必要だという意見は、90年代から多くの人によって語られてきた。最近でも、今回おきた大震災をきっかけにして、新たな社会システムを構築すべきという考えがいくつかみられた。

○「明治維新/敗戦」か、「黒船来航/満州事変」か

今回の震災・原発事故を「明治維新」「1945年の敗戦」に例える発言をよく目にした。だが、今回の大震災を日本の過去の近現代史上の出来事と対比させた場合、「明治維新/敗戦」よりは「黒船来航/満州事変」の方が適切であるかもしれない。

1853年に黒船が襲来し、その後15年ちかい混乱・動乱の時代を経て明治維新によって、近代的な国民国家づくりがなされた。また、1931年の満州事変後、15年ちかい戦争の時代を経て、敗戦の結果、戦後の民主主義国家づくりがおこなわれた。

今回の大震災が、「黒船襲来」や「満州事変」に該当した場合、これから15年ちかい混乱・動乱の時代が続き、その後に新しい国家づくり、あるいは新しい社会システムの構築がおこなわれるかもしれない。

これから混乱した時代が続くという考えを受け入れたくない場合は、次のように考えると気が楽になるかもしれない。1995年におきた「地下鉄サリン事件・阪神大震災」を「黒船襲来」「満州事変」に対応させれば、1995年以後、15年ちかい混乱・動乱の時代が続いたあと、新しい国家づくり（新しい社会システムの構築）がこれから始まるのだ。

・「黒船来航/満州事変」説

1853年・黒船来航　一約15年（混乱・動乱の時代）－
－1868年・明治維新　一約60年－
－1931年・満州事変　一約15年（混乱・動乱の時代）－
－1945年・敗　　戦　一約65年－
－2011年・東北関東大震災　一混乱・動乱の時代－
－新国家・新システムの構築

・「明治維新/敗戦」説

1853年・黒船来航　一約15年（混乱・動乱の時代）－
－1868年・明治維新　一約60年　－
－1931年・満州事変　一約15年（混乱・動乱の時代）－
－1945年・敗　　戦　一約50年　－
－1995年・阪神大震災一約15年（混乱・動乱の時代）－
－2011年・東北関東大震災（新国家・新システムの構築）

○おわりに

以上述べたことは観念的な遊びにすぎないから、現実的な思考をする人（あるいは現実的な思考しかできない人）は一笑にふすかもしれない。

福島原発事故が無事に解決されれば、阪神大震災後、10年位の間に復興がなされたように、これから10年位かけて復興がおこなわれるだろう。

その場合、現在の硬直した（あるいは金属疲労をおこした）社会システムがそのまま温存される可能性が高くなるが。

2025年に日本近現代史第2の底が？

＊ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2011年6月11日公開したものを一部修正して転載

人気ブログ「Chikirinの日記」を見にいったら興味深い記事を見かけた。（毎日見ているわけではなく、たまに思いついたように見にいつているので1か月ちかく前の記事だが。）

[<http://d.hatena.ne.jp/Chikirin/20110501:title=半藤一利氏「昭和史」>]

その記事では、半藤氏の日本の近現代史についての解釈（仮説）が紹介されていた。日本の歴史（社会）は、1865年を起点にして40年ごとにアップとダウンを繰り返すという説だが.....。

1865年から上昇の時代が始まり、1905年の日露戦争の勝利で頂点をむかえる。そこから下降の時代が始まり、1945年の敗戦でどん底までおちこむ。そこから再び上昇の時代が始まり、1985年、Japan as No1とまでよばれた経済成長期に第2の頂点を迎える。そして、今度は再び下降の時代を迎えて、2025年にまたどん底までおちこむ、という説だった。

この説を面白く感じたのは、自分が震災後にした記事と部分的に一致していたからだった。
[http://d.hatena.ne.jp/ono_gene/20110319:title=「明治維新/敗戦」？or「黒船来航/満州事変」？]

3月におきた大震災・原発事故を「明治維新/敗戦」と例える意見に対して、今回の出来事を過去の出来事に対比させるなら、むしろ「黒船来航/満州事変」と対比した方が適切なのではないかと、という仮説を提示したのだが.....。

今回の震災・原発事故が満州事変に該当するなら、これから15年ちかく混乱・動乱の時代が続く、その後、新しい社会システム（または国家）づくりが始まるのではないかと考えたが、今から15年後って、半藤氏が第2の底をむかえると指摘した2025年とほぼ一致するんだよね。

半藤説も自分の説もあくまでも仮説、歴史に対する1つの解釈にすぎないから、実際に2025年頃、第2の底がやってくるかはわからないけれども、今の状況をみているとあたってしまいそうな気がする。

これから6年後に第2の原発事故、その4年後に第3の原発事故がおきたら、満州事変～日中戦争～太平洋戦争という歴史を反復することになるけれど.....。